

日本鐵鋼協會第 41 回講演大會見學工場見學記

(昭和 26 年 4 月 3 日)

朝日新聞社 (第 1 班)

4 月 3 日午前 9 時半集合、10 時より約 1 時間に亘り講堂に於て新聞社の組織や活動状況の説明があり、11 時より約 40 分間社内を見學した。

上の方の階層は外國通信社支所や調査資料關係の部門が多く、下に行くに従つて業務、工務等人の動きの活潑な部門となつてゐる。組立てた活字の多くは使用後は熔解して更に新しく活字を社内で鑄造している。活字拾いは昔のまま一人が拾つてゐるが、急ぐ時には手分けしてやれるので却つて新式の機械(1人で操作)よりも早いという。輪轉機は16台、1台當り1時間に12~15萬部印刷され、折疊んだものがコンベヤで二階に上つて來るので、直ちに荷造し、コンベヤでトラックに積込む様になつてゐる。

結局新聞社全體が一つのスピードある機械たるの觀があり、晝勤の人が夕刊を、夜勤の人が朝刊を發行することになるが版を組み替えて少しでも新しい事實を報道せんとする努力に對して敬服した。

日本放送協會 (第 2 班)

午後 3 時集合、先づ第一スタジオを眼下に見下す觀覽席に案内され、こゝで放送局の概況を 20 分に亘り説明される。6 階建の大きな建物も大半は進駐軍に使用され如何にも手挾さうである。スタジオは大小合はせて 17 あるが、放送や録音に忙しく活動している由である。放送劇など少くも 4 回のテストを行い、中には 10 回以上の練習の上テスト盤を作り検討することもあるとのこと。毎晩聞き流している放送の陰の努力に感歎した。説明後二十の扉やとんち教室でおなじみの第一スタジオに入り折から世界の音樂の練習中の東京放送管絃樂團の練習を 20 分程聞き 4 時頃見學を終つた。(菊池 浩介)

日本コロムビア K.K. (第 2 班)

我々第 2 班は午前、日本コロムビア K.K. を午後、富士製鐵川崎製鋼所を見學することになつており 4 月 3 日午前 9 時 30 分日本コロムビアに K.K. に集合した。折悪しく雨降りで出足も鈍るかと思はれたが同時に見學する第 3 班と合はせ 52 名の參集をみた。

先づ技師長より當社の沿革を次いでレコード課長より

レコード製造工程の説明を伺つたが當社は外國人の創始で日本では最古のレコード會社の由で資本的にも數次の變遷をみたが現在は獨立して日本コロムビア K.K. となつてゐる。レコードの製造工程はワックスに吹込まれたものを電導化するために銀メッキすることから銅メッキニッケルメッキ、クロムメッキ等數回のメッキ操作を得てスタムパーを作りプレスにかけてレコードが出來るので金屬關係の仕事に携る者にとっては縁の薄い様に思はれる作業が實は中々縁が深く興味あるものであつた。

見學は作業行程に従つてワックスの仕上げ、吹き込まれたワックスの表面へ真空空中で薄く(10⁻⁵cm と言う)銀を附着させる工程、この面に銅をメッキせしめてマスターと稱する原板を作り、更にこれにメッキをくり返へしマザーをとり更にスタムパーを作る工程を見た。この最後のスタムパーは1枚で約 3000 枚のレコードを作ることが出来る由でマスターは原板として保存するものである。

次いでレコード材は表面原料と中芯材料とがあり各々配合練合されてプレスの所に運ばれスタンプされてレコードが作られて行くのでそれより検査を経て袋へ入れ函詰されるものである。

レコード製造工程を見學後當社研究所に於けるテレヴィジョンをも見學させて頂いて 11 時 30 分解散した。

(鶴野)

富士製鐵 K.K. 川崎製鋼所 (第 2 班)

コロムビア見學の後直に富士製鐵川崎製鋼所に伺う。直接當所に參集した會員もあつて豫定の 1 時には 40 名に達した、先づ當所々長取締役園田一夫氏より現況及び計畫に就いてお話があり次いで小城技師長より作業状況に就いて詳しい説明を伺い 4 ヶの班に分れて見學に移つた。

當所は現在は鋼片を同社、室蘭、釜石の兩製鐵所及び八幡製鐵所より求めてこれを壓延して帶鋼を製造しているが現在は月産 4500~5000t まで生産力を増加している。この帶鋼の約 50% はパイプ用で他が雜用であると言う。

加熱爐は毎時 12t のもの 2 基あり重油又はタールを用いている。これにて加熱せる鋼片は粗ロールにて 20 mm 厚としラフエツチングミル、複二重ロール、エツチングミル、3 段仕上ロール等にかけて所望の厚の帶鋼